

1986年に「窯のある広場・資料館」が開設され、2011年に25周年を迎えた。地域の人のために、地域の産業文化を保存し、公開するという当時のねらいや思いは今も変わっていない。常滑の産業史を飾った“土管”の展示することは、もう一度原点に回帰することと考えた。

「どかん???’という反応のお客さまが多い。すぐに土管のイメージが浮かぶのは年配の方で、若い人たちには、ドラえもんやジャイアンが土管で遊んでいたでしょう、との追加説明が必要となる。日本の近代化を地中で支えた大きな功労者で、土管なしでは近代化ができなかったが、日陰の身どころか、地中に隠す身の上だったことから認知されにくい。

19世紀のバリ、ロンドンには人が集中し、排泄物を川に捨てる、道路に捨てるのが日常化した。道路に捨てられたものはナイトソイル(夜の土)と呼ばれ、農家の人たちが夜、ひそかに回収した。ロンドン市内のテムズ川は汚物であふれ、時の首相がせき込んで演説できないぐらい汚臭が漂ったとの話がある。ストーク・オン・ Trentにあるトイレミュージアムに当時のロンドン市街が再現されているが、丁寧に汚臭まで再現されていた。通訳の女性は鼻を押さえ、私

を1人置いてさっさと出て行った。当時、チフスやペストが大流行し、ヴィクトリア女王最愛の夫・アルバートはチフスが原因で若死にしているが、宮殿の奥深くまで病原菌が侵入したことによる。清潔な都市づくりのため、水洗トイレと排水管が本格的に普及していくのは19世紀の中頃からである。

日本では文明開化と共に専門知識を持った外国人が多数呼ばれ、まちの近代化が始まる。横浜・関内にあった外国人居留地は木の側溝で汚物が滞留して不評を買ったため、明治5年には、江戸末期からやきもので土管をつくっていた常滑の土管を採用して下水道をつくる。大きな需要が発生したことにより、常滑焼の土管の品質が急激に安定していく。寸法の均一化、強度の向上、手づくりから量産へ。常滑で行なわれた創意工夫、製造法の革新、焼成の変革は限りない。横浜の居留地は人口も増えたため、明治17年から本格的に、広域に下水道土管を設置する。これ以降、下水道土管は日本中に広がり、衛生都市、健康都市を支えていくことになる。

明治、大正の時代に鉄道網が拡大するが、それに合わせて土管需要も拡大する。なぜかという、レールを敷設する場合に田や畑の脇を

流れる水路や小川を分断するため、土管を敷設して水路を守ることが必要になる。レールを横切るように土管を配置し、水路を確保した。また泥地や湿地帯を田や畑にするためにも土管は大活躍する。沼地や湿地を掘り、土管を埋めて水を吸収し、余剰水量を排出する。水量を減らすことにより、腰や胸までつかって作業していたが膝程度で作業できるようになるなど、作業性は上がり、沼地、湿地の耕作地化も含めて、生産性を高めていった。

日本の近代化や清潔なまちづくりに土管は欠かせなかった。明治・大正・昭和の食料増産の掛け声は、土管を使って水を確保し、余剰水量を排水することと同義語であった。都市の近代化や食料増産に大きく貢献した土管であるが、今は地中に埋まって知られずにいる。今回の常設展示を通じて、土管が果たした役割の大きさを知っていただくと共に、土管を産業化した常滑の人たちの知恵や工夫の数々を知っていただきたいと思っている。

INAXライブミュージアム

「窯のある広場・資料館」

<http://inax.lixil.co.jp/kiln/>

著作権所有者の都合により
掲出できません



1——配管系統図 横浜市元居留地下水道(施工:明治17-20年、設計と監理:神奈川県技師・三田善太郎)[図版復原:©TEM研究所]

2——鉄道土管敷設図[考証図版:©TEM研究所]

3,4——展示風景

著作権所有者の都合により
掲出できません